

1941 年と 1944 年の BBC ラジオドラマ 「カンタヴィルの幽霊」 ——第二次世界大戦前・中・後 BBC 放送の オスカー・ワイルド作品——

永 嶋 友

アングロアイリッシュ作家のオスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) の作品は BBC で幾度となく放送されてきた。BBC が開局した 1922 年から現在にいたるまでの BBC の放送情報を収録するプログラム・インデックスで Oscar Wilde と検索すると、実に 1000 項目以上がヒットする。¹⁾1922 年から第二次世界大戦終結までに BBC でラジオ・テレビ放送されたワイルド作品は、これらを放送日時の古い順に並び替えたときの最初の約 80 項目にあたる。これらの放送日、題名、番組、放送局／チャンネルをまとめると、文末の付録の表のようになる。

ワイルドの短篇「カンタヴィルの幽霊」(‘The Canterville Ghost’, 1887) は、第二次世界大戦より前に BBC で放送されることはなかったが、不思議なことに、第二次世界大戦期に少なくとも三度 (1941 年 11 月 20 日, 1944 年 5 月 2 日, 1944 年 7 月 27 日) ラジオドラマとして BBC ホームサービスで放送されている。このことに、何か意味を見出すことができるだろうか。本稿はまず 1922～1945 年に BBC でラジオ放送、テレビ放送されたワイルド作品を概観し、また、心霊主義と二つの世界大戦に関する社会的、文学的文脈を確認する。そして、BBC 文書保管センター (BBC Written Archives Centre) 所蔵の放送原稿や『リスナー』誌掲載の評論を参照しながら、1941 年と 1944 年の BBC ラジオドラマ「カンタヴィルの幽霊」を分析し、「カンタヴィルの幽霊」が第二次世界大戦期に三度ラジオドラマとして BBC ホームサービスで放送された意義につ

いて考える。結びでは、終戦後に放送されたラジオドラマ「カンタヴィルの幽霊」にも触れ、考察を深めたい。

1922 年～1945 年に BBC で放送されたワイルド作品

文末の表から明らかなように、1920 年代、30 年代は、ワイルドの喜劇や童話が BBC で繰り返しラジオ放送された。この時期に喜劇や童話が好まれた理由としては、ジョン・リース (John Reith, 1889-1971) のパブリックサービスの理念が 1920 年代、30 年代の BBC の放送に強く影響していたことが考えられる。²⁾ リースは 1923 年にイギリス放送会社 (British Broadcasting Company) の総支配人になり、1927 年 1 月 1 日から 1938 年 6 月 30 日までイギリス放送協会 (British Broadcasting Corporation) の初代会長を務めた人物である。長老派教会の牧師の家庭の生まれで、敬虔なキリスト教徒であったリースは放送で国民を上から教化、啓蒙することを目指していた。彼は、『教養と無秩序』(Culture and Anarchy, 1869) で知られるマシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822-1888) から思想的影響を受けた。リースの思想は今日ではリース主義 (Reithianism) とも呼ばれている。³⁾ 彼の著書『イギリスでの放送』(Broadcast over Britain, 1924) の中で、リースは公共放送によってもたらされる利益について、次のように述べている。

我々の考えでは、我々の責任は、できるかぎり多くの家庭にあらゆる部門の人間の知識、努力、業績の最良のものをすべてを送り届け、有害なものまたは有害になりうるものを避けることである。我々が公衆に与えようとしているものは、明らかに彼らにとって必要だと我々が考えるものであって、彼らが欲するものではない、という指摘を受けることが時折ある。しかし、自分が何を欲しているかを知る者はほとんどいないし、自分が何を必要としているかを知る者はさらに少ない。それらに〔我々がそう考えるものと、彼らが欲するものとの間には〕差がない場合が多い。このような批判はどの区分の国民に対するものなのか、と首をかしげる人もいるだろう。いずれにせよ、公衆のメンタリティを過大評価するほうが過小評価するよりも望ましいのである。⁴⁾

リースはこのように、放送する側が聴取者の利益となる内容を決めることをよしとし、そうすることで、公衆が教養を獲得し、成長すると考えていた。⁵⁾ 実際のところ、BBC はリースの指揮下で、1920 年代、30 年代は、国民の教養を育み、国民に害を及ぼすことがないと思われる子供・青少年向け番組、クラシック音楽、チャリティーアピール番組、ラジオ劇、詩や短篇の朗読、万人向けのライトコメディやバラエティー番組などを頻繁に放送した。その結果、1920 年代、30 年代のイギリスのラジオ放送は、草創期から多数の広告を放送し商業的であったアメリカのラジオ放送との明確な違いを生み出すことになった。⁶⁾ 加えて、リースは 1926 年のゼネラルストライキの頃から、BBC を政府指揮下の機関に変えようと目論んでいたウィンストン・チャーチル (Winston Churchill, 1874-1965) ら右派政治家を退け、BBC の中立性を保持したことでも知られている。⁷⁾

ワイルドの喜劇や童話は、このような 1920 年代、30 年代のリースの方針や当時の BBC の放送内容に合致するものであった。たとえば、ワイルドの 4 つの風習喜劇は道徳的で機智や警句に富み、「教養のある現代人の生活」を伝えるものであり、また、演者の動きをそれほど必要としないため、耳で聴くラジオ放送向きであると理解されていた。⁸⁾ ジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-1950) は、ワイルドの『ウィンダムミア卿夫人の扇』(*Lady Windermere's Fan*, 1892) について解説した彼のラジオトーク (1943 年 11 月 21 日放送) で、この劇は「当時の社会基準から見ても無害なものであり、むしろ観客を教化するようなもの」であり、「センチメンタルで教訓的である」と書き記している。⁹⁾ ワイルドの童話は、第二次世界大戦終結後まで続いた BBC の代表的な子供向け番組『子どもの時間』(*The Children's Hour*; 後に *Children's Hour* に改名) で繰り返し朗読された (表 21-23, 26, 28-29, 58-59, 61, 63, 66, 68, 71, 76)。また、1937 年 12 月 24 日放送の、聖書や著名作家の作品の抜粋から成るクリスマスイヴ選集「人びとへ好意」('Goodwill Towards Men') において、ワイルドの「わがままな巨人」('The Selfish Giant', 1888) が朗読され、同作品はキリスト教の文脈で受容されることになった (表 52)。¹⁰⁾ さらに『真面目が肝心』(*The Importance of Being Earnest*, 1895) やバレエ版「わがままな巨人」がテレビ放送されたことから理解できるように、

ワイルドの喜劇や童話は時にラジオだけでなくテレビ向きだと捉えられた(表 50, 53, 55-56)。BBC の第二次世界大戦前の代表的テレビ番組の一つに『ピクチャーページ』(*Picture Page*, 1936-1939)があるが、こうした黎明期の BBC テレビ番組は複雑な動きを視覚的に伝えることを重視していた。巨人や子どもたちが舞台を動き回るバレエ版「わがままな巨人」は、この目的にあう作品として判断されたと推測できる。

ワイルドの喜劇や童話以外のジャンルの作品はどうだろうか。ワイルドの喜劇や童話に次いで、ワイルドのエッセイ、詩や短篇が BBC でよく放送されていた(表 33, 37, 39-41, 49)。エッセイ、詩、短篇は、BBC では開局当初からしばしば放送され、朗読に効果音や音楽や歌などが加えられ、ラジオドラマやオペラや楽曲のように仕立てあげられることもあった。1930 年 11 月 1 日の『オーケストラコンサート——BBC オーケストラ』('An Orchestral Concert: The B.B.C. Orchestra')で放送されたワイルドの詩「春の日々から冬へ」('From Spring Days to Winter')はその好例と言える(表 33)。同様の例に、1934 年 2 月 5 日の『ワイヤレスミリタリーバンド』(*The Wireless Military Band*)で放送されたリヒャルト・シュトラウス(Richard Strauss, 1864-1949)のオペラ『サロメ』(*Salome*, 1905)の曲「7つのヴェールの踊り」('Dance of the Seven Veils')がある(表 38)。ワイルドの悲劇『サロメ』(*Salomé*, 1891)は、王女サロメの妖艶さや狂気を考えると、リースのいう国民にとっての「有害なものまたは有害になりうるもの」に該当しそうだが、おそらく、歌詞や台詞のないこの曲は問題ないと判断されたのだと思われる。

第二次世界大戦開戦後も、ワイルドの喜劇、童話、短篇は BBC でしばしば放送された。その一方で、この時期に初めてワイルドの「レディング牢獄のバラッド」('The Ballad of Reading Goal', 1897)と短篇「カンタヴィルの幽霊」が BBC で放送されたことは興味深い(表 64-65, 72-74)。ワイルド自身を含む獄中の囚人たちの苦悩を描いた「レディング牢獄のバラッド」と、妻殺しの呪いに苦しむ幽霊を滑稽に描いた「カンタヴィルの幽霊」は、『サロメ』と同様に、一見リースのいう国民にとって「有害なものまたは有害になりうるもの」として捉えられそうである。しかし、この時リースはすでに会長職を辞任しており、

BBC は戦争に向けて方針転換をし、プロパガンダ性を少なからず有する番組を放送していたため、いくぶん陰鬱なこの二作品も戦争に関する何かしらの目的を伴って放送に至ったと推察される。たとえば、1941 年と 1944 年に BBC ホームサービスで放送された「レディング牢獄のバラッド」は聴取者たちにドイツ軍によって捕虜となった人びとや強制収容された人びとを想起させ、イギリス国民のドイツに対する敵対心を高めることに寄与したかもしれない。ただし、この放送時間（それぞれ 15 分間）と詩の長さから察するに、省略可能な部分、悲観的すぎる場面、放送に不適切な箇所など、元の長さの約半分が削除されて放送されていたと思われる。¹¹⁾大戦期の「レディング牢獄のバラッド」の放送原稿は BBC 文書保管センターで確認できないため、これ以上の分析は難しい。一方、大戦期に BBC ホームサービスで三度放送された「カンタヴィルの幽霊」の原稿 2 つは BBC 文書保管センターで確認することができ、詳細な考察が可能である。

心霊主義と二つの世界大戦

ここで、第二次世界大戦期の BBC ラジオドラマ「カンタヴィルの幽霊」を考察する事前準備として、心霊主義と二つの世界大戦に関する社会的、文学的文脈を簡単に確認したい。

イギリスで心霊主義が広く普及し、全国的に組織化が進んだのは 1860 年代のことだった。その後、未曾有の犠牲者を出した第一次世界大戦ののち、戦死者との霊的なつながりを求める声が多く寄せられ、イギリスの心霊主義はより大きな社会的影響力をもつことになる。当時の心霊主義は、聖職者や心理学者の支援のもと、スピリチュアルヒーリングを提供し、戦争神経症患者を治療することもあった。¹²⁾

その後、第二次世界大戦が開戦し、1940 年からドイツ軍による大空襲^{ブリッツ}が始まると、空襲や灯火管制がイギリス国内の心霊主義に変化をもたらした。たとえば、空襲や戦況を予言する霊媒師が人気を集めたり、多くの兵士だけでなく内閣関係者までもが交霊会に参加したりした。¹³⁾一方で、第一次大戦時とは異

なり、第二次大戦時は1942年頃から、政府や警察が、国民の士気を下げかねない怪しげな霊媒師たちの取り締まりを強化した。その最大の事件は、亡くなった船員を交霊会で霊視し、イギリス戦艦 HMS バーラム号 (HMS Barham) の沈没を暴露した霊媒師ヘレン・ダンカン (Helen Duncan, 1897-1956) が1944年に投獄されたことだった。¹⁴⁾ 他方で、政府や新聞は、国民に浸透している心靈主義、また、当局に協力的な霊媒師たちを利用し、心靈主義の視点でイギリスの勝利やナチスの邪悪な思想を国民に説明し、理解させようとした。要するに、幽霊はあくまでイギリスの味方であるべきだと考えられていたのである。¹⁵⁾

当時の劇や小説やラジオ放送はこのような心靈主義に対する当局の態度を反映し、幽霊の描き方に注意を払っていた。たとえば、ノエル・カワード (Noël Coward, 1899-1973) は、ある男性の前妻と後妻が幽霊として出現し彼を悩ますという内容の喜劇『陽気な幽霊』 (*Blithe Spirit*, 1941) を大戦期に発表した。この劇には〈心情〉はないのだから、そのような〔大戦期に不吉な主題を扱う作品を書いたという〕疑いは見当違いだ」と主張した。¹⁶⁾ また、ジョセフィン・レズリー (筆名 R・A・ディック) (Josephine Leslie, R. A. Dick, 1898-1979) の小説『幽霊とミューア夫人』 (*The Ghost and Mrs. Muir*, 1945) は、ある女性が引っ越し先の家に棲みつく船乗りの幽霊と恋に落ち、彼と共作で本を執筆し大成するも、後に彼を裏切ってしまうが、最後は自身も幽霊となり彼と再会を果たすという心温まる内容であり、大戦後の社会に向けて協力的な幽霊との共存をポジティブに描き出した。¹⁷⁾ 同様に、空襲の被害を受けた国内の歴史的建築物に焦点をあて、関連の歴史や人物たちの力強さや復活力レジリエンスを描いた BBC のラジオフィチャーシリーズ『石たちは叫び出す』 (*The Stones Cry Out*, 1941) に登場する幽霊たちは、ナチスを抗議し、イギリスを鼓舞する点で一貫している。¹⁸⁾ 第二次世界大戦期の劇、小説、ラジオ放送では、幽霊が人びとの士気を下げないように、こうした工夫がなされていた。

イギリスはしばらく第二次世界大戦を単独で戦っていたが、その間、アメリカは1941年3月11日成立の武器貸与法や同年8月14日発表の大西洋憲章を通じて、第二次世界大戦への直接関与へと着実な歩みを進めていた。そして、1941年12月7日の日本軍による真珠湾攻撃の翌日、アメリカは正式に参戦し

た。興味深いことに、1941 年頃からイギリスとアメリカの結びつきを強調する BBC ラジオ放送が急増している。¹⁹⁾ また、第二次世界大戦期の BBC ラジオドラマは聴取者の士気を高める暗示的プロパガンダにも従事していた。²⁰⁾

1941 年と 1944 年の BBC ラジオドラマ「カンタヴィルの幽霊」

このような状況下で、オスカー・ワイルドの「カンタヴィルの幽霊」は第二次世界大戦期に BBC ホームサービスで少なくとも三度（1941 年 11 月 20 日、1944 年 5 月 2 日、1944 年 7 月 27 日）ラジオ放送された（表 65, 72, 74）。このうち、1 つ目と 3 つ目の放送原稿を BBC 文書保管センターで確認することができた。²¹⁾ 共にメアリ・カスカート・ボラー（Mary Cathcart Borer）による翻案で、放送時間は前者は 40 分、後者は 30 分であった。ボラーは原作の地の文を大胆にカットし、時に地の文を会話に変更し、ト書きでは効果音や声色の指示を与え、優れたラジオドラマを創作した。前者の放送原稿に所々修正を加え、全体の 5 分の 1 ほどをカットしたものが後者の放送原稿のようである。なお、両作のプロデューサーは異なり、前者はジョン・チートル（John Cheatle）、後者はピーター・クレスウェル（Peter Creswell）である。この 2 つのラジオドラマには、原作からの変更点がいくつか見られる。以下では、このラジオドラマ版「カンタヴィルの幽霊」の特徴を紹介し、また本作が前節で提示した社会的、文学的背景をどのように反映しているのかを考察する。

両作では、冒頭から「むこうのアメリカ人はどなたですか」「ハイラム・B・オーティス、新しいアメリカ公使ですよ」「なんと、カンタヴィル屋敷をお買い取りになったお方か」「彼はあの幽霊について知っているのだろうか」といった会話が繰り返されている。原作とは異なり、地の文の語りではなく、会話でラジオドラマを始めることで、冒頭から臨場感を出すとともに、原作よりも、アメリカとイギリスの友好関係という主題をより前面に出しているように思える。²²⁾ 臨場感という点については、ほかにも、カンタヴィル家の祖先、幽霊のサー・サイモンが話す場面は風、時計、鎖、ドアなどのサウンドエフェクトで効果的に演出されている。

幽霊の存在に関して、イギリス人のカンタヴィル卿とアメリカ人のオーティス氏の意見が異なるのは原作通りである。ただし、オーティス氏がカンタヴィル卿に「幽霊などは存在しませんし、英国貴族のために自然の法則が停止されることもないでしょう」と発言する場面は、あやしい幽霊や霊媒師を追い払おうとする第二次世界大戦期の政府や警察の態度に呼応しているようにも感じられる。²³⁾ほかにも、原作通りに、オーティス氏が床の謎の血痕を消すためにピンカートン社のシミ取りを提案する場面など、所々でアメリカ的要素がコミカルに描かれているが、全体的に、そして、オーティス一家がカンタヴィル屋敷に来て、幽霊を怖がることなく鎮め、カンタヴィル卿から感謝されるというプロットが、アメリカとイギリスの友好関係や協力体制をほのめかしている。

原作とは異なり、幽霊のサー・サイモンと幽霊のレイディ・エリノアが「幽霊的な声」で会話する場面があるのは興味深い。「キャリアのある」幽霊としてプライドを示そうとしながら、弱々しい態度を露呈するサー・サイモンに、彼に殺された妻のレイディ・エリノアが「妻らしく」寄り添う姿勢を見せるのは滑稽である。この演出には、カワードの『陽気な幽霊』のように、幽霊の滑稽さや親密さを前面に出し、聴取者が幽霊をシリアスに捉えないようにする効果が考えられる。また、この演出には、直前にある幽霊的なうめき声や金属音が聴取者に恐怖感を与えすぎないための配慮としても考えられる。その後は、サー・サイモンがオーティス家の人びとを脅かすのに失敗し、レイディ・エリノアが彼を慰め、鼓舞し、再びオーティス家の人びとを脅かすための計画を二人で練るという内容の会話が展開される。²⁴⁾

サー・サイモンがオーティス家の少女ヴァージニアと対話する次の場面では、自信を失くしたサー・サイモンはヴァージニアから説教を受け、悲痛な心情を明かすようになる。彼が「低く、夢うつつな声」で、森の奥にある死の庭、そして、死について半ば独白する場面はラジオ向きであり、意識の流れや複雑な心理描写を扱うラジオモダニズム的である。²⁵⁾サー・サイモンが死を受け入れ、オーティス氏が彼の葬式を手配し、また、ヴァージニアが死と生について思索し「愛はその双方に勝る」と言う結末部は、当時の心靈主義の文脈を踏まえて、戦時でも幽霊は最後には安らかに眠ることを伝え、聴取者である市

民や兵士たちに安心感を与えたと思われる。²⁶⁾

このラジオドラマに対する聴取者調査報告書は BBC 文書保管センターでは見つからなかったものの、1944 年 8 月 3 日『リスナー』掲載の劇作家、劇批評家ハーバート・ファージョン (Herbert Farjeon, 1887-1945) のラジオ批評「放送ドラマ——幽霊とカモメ」(‘Broadcast Drama: Ghosts and Gulls’) は確認できた。²⁷⁾ その概要を説明すると、まずファージョンはラジオドラマ「カンタヴィルの幽霊」が夏ではなくクリスマスの時季に放送されるとなお良かったと言う。また、戦時で人びとが懐疑的になっている現在——またこの短篇の出版時も——幽霊を面白がるのは幽霊を怖がるのと同様に決して簡単ではないと指摘する。他方「カンタヴィルの幽霊」では、1882 年のアメリカ講演ツアーを経たワイルドが残した、アメリカ人に向けた「お茶目でとげのある言葉」やアメリカ人に関する警句を楽しむことができる。ファージョンは、このラジオドラマの最も優れている要素は、プロデューサーのクレスウェルによって創られた「ゴーストノイズ」だと言うが、これは前述したうめき声や金属音など、サー・サイモンが発言する際に付随する音声エフェクトを指していると推察できる。この批評の副題「幽霊とカモメ」が示すように、ファージョンにとってこのゴーストノイズは新しいサウンドであり、カモメの声のように慣れ親しんだ古いサウンドとは一線を画すものだった。こうした「音は放送のエッセンスであり」「多くの番組の最初のインスピレーション」となり、そこから「物語がまるまる 1 つ生まれる」かもしれない、と彼は主張する。最後にファージョンは、BBC のサウンド制作部は今後も「新たな武器弾薬」や「秘密兵器」を創り出せるだろうか、と問いかける。彼は BBC の新しいサウンドを「武器弾薬」や「秘密兵器」と呼ぶことで、そのサウンドを含む BBC ラジオドラマがプロパガンダ的役割を果たし、国民の士気を高めるなど何らかのかたちで戦争に貢献する可能性をほのめかしている。

以上のように、1941 年と 1944 年の BBC ラジオドラマ「カンタヴィルの幽霊」は第二次世界大戦の文脈、同時期の心霊主義の文脈を色濃く反映している。ワイルドの「カンタヴィルの幽霊」が第二次世界大戦期に三度も放送されたのは、やはりこの短篇が英米の違いをコミカルに表わしながらも、イギリス

とアメリカの友好関係を効果的に描いていることが大きいと思われる。またそれは、このラジオドラマでは、第二次世界大戦期の政府や警察、同時期の幽霊を扱う劇、小説、ラジオ放送と同じように、幽霊が人びとの士気を下げないように適切な工夫がなされていることも関係していると思われる。このラジオドラマは、ファージョンが示唆したように、むしろ幽霊は人びとの味方であること、怖がる対象ではないことなどを伝え、たとえば、遺族を亡くしたイギリス人の士気を再び高めるプロパガンダとして機能していたとも考えられる。この作品が、心霊主義が浸透していたイギリス国内に向けて、BBC ホームサービスで放送されていたことも無関係ではないだろう。

おわりに——第二次世界大戦後に BBC で放送された「カンタヴィルの幽霊」

オスカー・ワイルド作品は第二次世界大戦後も現在まで BBC で様々な文脈で放送され続けている。そのすべてをいまここで論じるのは難しいが、いくつかの論点のみ触れておきたい。たとえば、第二次世界大戦後には、BBC の番組『女性の時間』(Woman's Hour, 1946-) でラジオドラマ「カンタヴィルの幽霊」が放送された。²⁸⁾これらの放送では、幽霊を鎮めた少女ヴァージニアに焦点を当てるなどのフェミニズム的な読解がなされているかもしれない。1960 年代以降は BBC テレビでも「カンタヴィルの幽霊」が放送されている。²⁹⁾これらの放送では、以前のラジオドラマで練られた様々な幽霊の演出が、カラフルな視覚性を帯びて発展しているかもしれない。

第二次世界大戦後、イギリスはラジオドラマの全盛期を迎え、芸術性がさらに追求されることになった。そのような状況下で 1954 年 2 月 16 日に放送された、名優ロレンス・オリヴィエ (Laurence Olivier, 1907-1989) が幽霊を演じた BBC ラジオドラマ「カンタヴィルの幽霊」は注目に値する。というのも、このラジオドラマでは、制作陣とオリヴィエが素晴らしいゴーストノイズを創り上げているのである。第二次世界大戦期のラジオドラマ「カンタヴィルの幽霊」のゴーストノイズが実際どのように聴こえたのかは推測の域を出ないが、オリヴィ

エ主演の「カンタヴィルの幽霊」はその革新的であったゴーストノイズを引き継いでいる可能性が考えられる。また、オリヴィエが演じるサー・サイモンの独白が比較的長いという点は、戦後のラジオドラマ黄金期のモダニズム的特徴の一つとも捉えられる。³⁰⁾ 1941 年と 1944 年の BBC ラジオドラマ「カンタヴィルの幽霊」は戦後イギリスのラジオドラマ全盛期につながる革新性を有していたのではないだろうか。

* 本稿は、筆者が 2021 年 12 月 11 日に日本ワイルド協会第 46 回大会で行なった研究発表「第二次世界大戦期のラジオ劇版「カンタヴィルの幽霊」」の内容に加筆、修正を施したものであり、科学研究費（22K13074, 25K16218）、慶應義塾学事振興資金、福澤諭吉記念慶應義塾学事振興基金の助成を受けて執筆された。The BBC material was originally written in English and has been translated to Japanese by the author.

- 1) 'Programme Index', *BBC*, <<https://genome.ch.bbc.co.uk>> [accessed 20 September 2025].
- 2) 津田正太郎「『公共放送』という理念——ジョン・リースの思想における BBC の独立の意義」『マス・コミュニケーション研究』68 (2006), 131-47 (pp.136-37).
- 3) David Hendy, 'Reithianism', *BBC*, <<https://www.bbc.com/historyofthebbc/100-voices/inventingthefuture/reithianism>> [accessed 20 September 2025].
- 4) J. C. W. Reith, *Broadcast over Britain* (London: Hodder and Stoughton, 1924), p. 34.
- 5) 津田, p. 142.
- 6) Michele Hilmes, *Network Nations: A Transnational History of British and American Broadcasting* (New York: Routledge, 2012), p. 44.
- 7) 津田, p. 140.
- 8) Desmond MacCarthy, 'Modern Drama', *The Listener*, 16 April 1930, p. 680; 'The Listener's Choice for Next Week', *The Listener*, 12 June 1929, p. 842.
- 9) George Orwell, *Orwell: The War Broadcast*, ed. by W. J. West (London: Duckworth, 1985), pp. 169-70.
- 10) John Milton, Alfred Tennyson, Thomas Hardy, Robert Bridges, Samuel Taylor Coleridge, Thomas Traherne, William Wordsworth, A. E. Housman, A. Clutton-Brock, Rupert Brooke, Siegfried Sassoon の著作の朗読とともに「わがまな巨人」が朗読された; 'Friday Regional', *Radio Times*, 17 December 1937, 64-69 (p. 66).
- 11) 'The Ballad of Reading Gaol', *BBC*, <<https://genome.ch.bbc.co.uk/3747f41df7734f138d7627c7fdb6ec0d>> [accessed 20 September 2025]; 'The Ballad of Reading Gaol', *BBC*, <<https://>

- genome.ch.bbc.co.uk/324fd76814a44245a126ae10341340d8> [accessed 20 September 2025].
- 12) 高林陽展「二〇世紀前半イギリスにおける教会・心理学者・精神科医の相克——スピリチュアル・ヒーリング問題をめぐって」『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』22 (2014), 59-85 (pp. 62-77).
- 13) Geoffrey K. Nelson, *Spiritualism and Society* (London: Routledge and Kegan Paul, 1969), pp. 162-64
- 14) 高林, pp. 62-63; Patrick Deer, *Culture in Camouflage: War, Empire, and Modern British Literature* (Oxford: Oxford UP, 2009), pp. 151-54; Malcolm Gaskill, *Hellish Nell: The Last of Britain's Witches* (London: Fourth Estate, 2002), pp. 181-83; Nelson, pp. 165-66.
- 15) Deer, p. 151; David Clarke, *Britain's X-traordinary Files* (London: Bloomsbury, 2014), p. 113.
- 16) Graham Payn, *My Life with Noël Coward* (New York: Applause, 1994), p. 89.
- 17) Margaret D. Stetz, "'The Ghost and Mrs. Muir': Laughing with the Captain in the House", *Studies in the Novel* 28.1 (1996), 93-112 (pp. 94, 103-04).
- 18) 永嶋友『第二次世界大戦期イギリスのラジオと二つの戦争文化——BBC, プロパガンダ, モダニズム』(慶應義塾大学法学研究会, 2024 年) pp. 70-75.
- 19) 永嶋, pp. 208-09.
- 20) "Draft Statement on Policy of Features and Drama in Time of War: For Home Service Board, Friday, 1st December, 1939", 21 November 1939, R19/352/1, BBC WAC, pp. 1-2.
- 21) BBC 文書保管センターには多くの放送作品の制作ファイルが残されているが、この2つの作品の制作過程を示す書簡やメモは確認することができなかった。
- 22) BBC WAC broadcast script of the 1941 'The Canterville Ghost', p. 1; BBC WAC broadcast script of the 1944 'The Canterville Ghost', p. 1.
- 23) The 1941 'The Canterville Ghost', p. 1; the 1944 'The Canterville Ghost', p. 1.
- 24) The 1941 'The Canterville Ghost', pp. 3-7; the 1944 'The Canterville Ghost', pp. 4-8.
- 25) The 1941 'The Canterville Ghost', pp. 5-9; the 1944 'The Canterville Ghost', pp. 8-11.
- 26) The 1941 'The Canterville Ghost', pp. 9-14; the 1944 'The Canterville Ghost', pp. 11-16.
- 27) Herbert Farjeon, 'Critic on the Hearth', *The Listener*, 3 August 1944, p. 136.
- 28) 'The Canterville Ghost' (24 February 1961), 'The Canterville Ghost' (31 October 1972).
- 29) 'The Canterville Ghost' (23 December 1962), 'The Canterville Ghost' (23 July 1965).
- 30) このラジオドラマの録音と思われる音源がネット上で確認できる。このラジオドラマは1953年12月26日にアメリカのNBCでも放送された。

付録 1922～1945 年に BBC でラジオ・テレビ放送されたワイルド作品

No.	放送日	題名	番組	放送局／チャンネル
1	17 Apr 1923	<i>A Woman of No Importance</i> , Act I	-	5WA Cardiff
2	1 May 1923	<i>A Woman of No Importance</i> , Act II	-	5WA Cardiff
3	15 May 1923	<i>A Woman of No Importance</i> , Act III	-	5WA Cardiff
4	22 May 1923	<i>A Woman of No Importance</i> , Act IV	-	5WA Cardiff
5	25 Sep 1923	<i>Lady Windermere's Fan</i>	-	5WA Cardiff
6	29 Apr 1924	<i>A Woman of No Importance</i>	<i>A Modern Comedy</i>	5WA Cardiff
7	13 May 1924	<i>The Importance of Being Earnest</i>	<i>Dramatic Evening</i>	2LO London
8	15 May 1924	<i>An Ideal Husband</i>	<i>Modern Comedy Night</i>	5WA Cardiff
9	18 Sep 1925	<i>A Woman of No Importance</i>	-	5WA Cardiff
10	23 Nov 1925	<i>The Importance of Being Earnest</i>	-	5WA Cardiff
11	7 Jan 1926	<i>An Ideal Husband</i>	-	5WA Cardiff
12	3 Mar 1926	<i>Lady Windermere's Fan</i>	-	5WA Cardiff
13	29 Apr 1926	<i>Lady Windermere's Fan</i>	-	2LO London
14	28 Oct 1926	<i>Lady Windermere's Fan</i>	-	5WA Cardiff
15	12 Dec 1926	'The Selfish Giant'	-	2LO London
16	3 May 1927	<i>The Importance of Being Earnest</i>	-	2LO London
17	17 May 1927	'The Fisherman and His Soul'	-	5XX Daventry
18	22 Jun 1927	<i>The Importance of Being Earnest</i>	-	2BE Belfast
19	3 Jul 1927	'The Happy Prince'	<i>A Light Orchestral Concert</i>	2LO London
20	5 Aug 1927	<i>Lady Windermere's Fan</i>	-	2BE Belfast
21	11 Aug 1927	'The Remarkable Rocket'	<i>The Children's Hour</i>	2LO London
22	20 Oct 1927	'The Devoted Friend'	<i>The Children's Hour</i>	2LO London and 5XX Daventry
23	3 Nov 1927	'The Remarkable Rocket'	<i>The Children's Hour</i>	6FL Sheffield
24	17 Nov 1927	'The Selfish Giant'	<i>Music and Story</i>	5GB Daventry (Experimental)
25	6 Jan 1928	'The Happy Prince'	-	5GB Daventry (Experimental)
26	5 Apr 1928	'The Happy Prince'	<i>The Children's Hour</i>	5WA Cardiff

27	17 Apr 1928	<i>Lady Windermere's Fan</i>	-	2LO London and 5XX Daventry
28	19 Apr 1928	'The Selfish Giant'	<i>The Children's Hour</i>	5SX Swansea
29	25 Mar 1929	'The Selfish Giant'	<i>The Children's Hour</i>	2LO London and 5XX Daventry
30	2 Apr 1929	'The Happy Prince'	<i>Poetry and Music</i>	5GB Daventry (Experimental)
31	30 Oct 1930	<i>The Importance of Being Earnest</i>	-	Regional Programme
32	31 Oct 1930	<i>The Importance of Being Earnest</i>	-	National Programme
33	1 Nov 1930	'From Spring Days to Winter'	<i>An Orchestral Concert</i>	National Programme
34	8 Jan 1932	<i>The Importance of Being Earnest</i>	<i>Facet</i>	5WA Cardiff
35	13 Sep 1932	<i>An Ideal Husband</i>	-	Regional Programme
36	15 Sep 1932	<i>An Ideal Husband</i>	-	National Programme
37	6 Mar 1933	'The Harlot's House'	-	National Programme
38	5 Feb 1934	'Dance of the Seven Veils' (from <i>Salome</i>)	<i>The Wireless Military Band</i>	Regional Programme
39	20 Feb 1934	'The Harlot's House'	-	National Programme
40	1 Aug 1934	'The Doer of Good'	-	National Programme
41	15 Oct 1934	'The Decay of Lying'	-	National Programme
42	17 Dec 1934	<i>The Importance of Being Earnest</i>	-	2BE Belfast
43	2 Jul 1935	<i>The Importance of Being Earnest</i>	-	National Programme
44	3 Jul 1935	<i>The Importance of Being Earnest</i>	-	Regional Programme
45	29 Dec 1935	'The Nightingale and the Rose'	<i>Short Story Reading</i>	Regional Programme
46	7 Jun 1936	'The Selfish Giant'	<i>Two Short Stories</i>	Regional Programme
47	22 Nov 1936	<i>The Importance of Being Earnest</i>	-	National Programme
48	10 Jan 1937	<i>Lady Windermere's Fan</i>	-	National Programme
49	21 Sep 1937	'Tread Lightly'	<i>English Song Writers</i>	Regional Programme
50	2 Nov 1937	<i>The Importance of Being Earnest</i>	-	BBC Television
51	13 Nov 1937	'The Nightingale and the Rose'	<i>The BBC Orchestra</i>	National Programme

52	24 Dec 1937	'The Selfish Giant'	<i>Goodwill Towards Men</i>	Regional Programme
53	23 Aug 1938	<i>The Importance of Being Earnest</i>	-	BBC Television
54	21 Feb 1939	<i>The Importance of Being Earnest</i>	<i>Theatre</i>	Regional Programme
55	5 Mar 1939	'The Selfish Giant'	<i>Ballet</i>	BBC Television
56	22 Apr 1939	'The Selfish Giant'	<i>Ballet</i>	BBC Television
57	16 Aug 1939	'The Star Child'	-	Regional Programme
58	22 Mar 1940	'The Happy Prince'	<i>The Children's Hour</i>	BBC Home Service
59	21 Jul 1940	'The Selfish Giant'	<i>Children's Hour</i>	BBC Home Service
60	22 Dec 1940	<i>The Importance of Being Earnest</i>	-	BBC Home Service
61	31 Dec 1940	'Gardd y Cawr' ('The Selfish Giant')	<i>Y Camgymeriad</i> (Welsh <i>Children's Hour</i>)	BBC Home Service
62	13 Apr 1941	<i>A Woman of No Importance</i>	-	BBC Home Service
63	18 May 1941	'The Devoted Friend'	<i>Children's Hour</i>	BBC Home Service
64	1 Oct 1941	'The Ballad of Reading Goal'	-	BBC Home Service
65	20 Nov 1941	'The Canterville Ghost'	-	BBC Home Service
66	3 Apr 1942	'The Selfish Giant'	<i>Children's Hour</i>	BBC Home Service
67	16 May 1942	<i>The Importance of Being Earnest</i>	<i>Saturday Matinee</i>	BBC Forces Programme
68	11 May 1943	'Y Tywysog Llawen' ('The Happy Prince')	<i>Y Camgymeriad</i> (Welsh <i>Children's Hour</i>)	BBC Home Service
69	21 Oct 1943	'The Happy Prince'	<i>For the Schools</i>	BBC Home Service
70	19 Mar 1944	<i>An Ideal Husband</i>	-	BBC Home Service
71	7 Apr 1944	'The Happy Prince'	<i>Children's Hour</i>	BBC Home Service
72	2 May 1944	'The Canterville Ghost'	<i>For the Schools</i>	BBC Home Service
73	29 May 1944	'The Ballad of Reading Goal'	-	BBC Home Service
74	27 Jul 1944	'The Canterville Ghost'	-	BBC Home Service
75	4 Jul 1945	'A Note of Admiration'	-	BBC Home Service
76	6 Aug 1945	'The Happy Prince'	<i>Children's Hour</i>	BBC Home Service